

東京研修作文

台風が通ることが懸念されたが、晴天のなか東京研修の日を迎えることができた。8月8日、私たちは東京を訪れた。

午前中は、DF・笹川平和財団共催夏季プログラムに参加した。始めに近藤玄大さんの講演を聞き、その後グループディスカッションをした。

近藤玄大さんは、義手開発をされている。4歳から8歳までニューヨークに住み、帰国後はバスケットボールや勉強に取り組んだそう。東京大学に入学後し交換留学でカリフォルニアで勉強された。2011年からソニーで働き、業務外の時間を利用して仲間と義手の開発を行った。そのとき作った義手が、コンテストで賞を取りベンチャー企業を立ち上げるきっかけになった。2014年から2016年までベンチャー企業で働き、2016年から再びソニーで働いている。ソニーでもう一度働こうと思ったのは、デザインや技術、ビジネスについて学びたいと思ったから。近藤さんが「一度辞めた会社にもう一度勤めるのは、中途半端に生きているように見えるかもしれないが、私は後悔していません。」とおっしゃっていたのが印象に残った。私は、今まで1つの会社で働き続けるのが理想の働き方だと思っていたが、近藤さんの話を聞いて働き方は一つではないと知った。

グループディスカッションでは、3人の方からお話を聞いた。1人目は、前川美湖さん。国連で働いた経験を生かして笹川平和財団にて海洋環境保全、海洋政策に関するプロジェクトを担当されている。留学経験も豊富な方で上智大学文学部で英語を勉強された。そんな前川さんが外国の方と話すときに心がけていることは、相手に対して敬意を持つこと。謙虚な気持ちで相手と話すように意識しているようだ。また、英語力を向上させるには、音読が必要だそう。コミュニケーションをとることも効果的。「ミスをすることで学んでいくので、ミスを恐れずに話してほしい。」とおっしゃっていた。仕事をしながら、結婚・子育てもした前川さん。お話を聞いて、女性としても社会人としても充実されていると感じた。

2人目は、長崎文康さん。東北大学法学部を卒業後、中央労働委員委員をした方だ。労働委員会で大切にしていたことは、「傾聴」。労働委員会では、労働者とのトラブルを解決するため、両者の話をよく聴くことが大切なのだそうだ。

3人目は、遠藤恭一さん。三井物産執行委員として経営管理を担当された。「英語を習得するだけでは国際人になれない。」という言葉が印象的だった。国際社会で生きていくには、さまざまな視点から物事を見る複眼思考が大切だと知った。

1日目の午後は、外務省を訪ねた。まず始めに案内されたのは、記者会見室。記者会見の

時間になると、隣の部屋に常在している記者がこの部屋に入ってきて取材をする。次に、会議室で外務省についての説明を受けた。外務省は、東京霞ヶ関にある外務本省と世界 145 か国に置かれている在来公館(大使館など)で構成されている。外務本省に約 2500 名、在来公館に約 3400 名が働いている。外務本省と在来公館では、電報を使って連絡を取り合っている。また、多くの外交の仕事を経験するために、2~3 年で異動がある。外交官は、外国で働くので外務省には 43 か国語の言語の専門家がいる。外務省は、日本と海外とを結ぶ場所だとわかった。

最後に、外務省の国連政策課で働く佐野さんからお話を伺った。佐野さんは、仙台二高 OG で東京大学文科一類に入学。その後試験に合格し外交官になった。二高に入学する前から、外交官になるという夢を持ち、東京大学を志したそうだ。大学時代は、さまざまな国で研修をし、現在入省 2 年目。国連政策課では安全保障理事会の政策を行ったり、世界の出来事に対する日本の意見を考えたりしている。外国の方と話すときに気をつけていることは、ゆっくり良い発音で話すことと話題を見つけること。良い発音でなければ、相手に伝わらないからだ。初めて会った人とは、共通の話題がないけれども何か話題を見つけることで会話を続けられるそうだ。海外に留学する中で日本との違いに驚いたり、戸惑ったりしたこともあるそうだ。例えばケニアで会議があったとき、日本人は時間を気にするが、アフリカの人は時間を気にせず、自由に働いていた。国によって働き方や考え方は違うのだと佐野さんは感じたそうだ。時間に余裕を持たせて計画するなどの工夫が必要なのだそうだ。

佐野さんが二高 OG と聞き、お話を聞けてとても嬉しかった。外交官には、英語力だけでなく相手のことを思いやり協力することが必要なのだと知った。

夕食後、二高の OB・OG の方との座談会があった。4 人の方から、二高時代や大学生活についてのお話を聞いた。

1 人目は、東京大学の理系学部の方。高校 1 年生のときは、あまり勉強していなかったそうだ。2 年生になってから、熱心に勉強に取り組み東大に合格。将来について考える上で大切なのは、好きなことの共通点を考えること。その方は、サッカー観戦やギターが好きで、共通点を考えたところ「沢山の人が一緒になって楽しめる空間が好き」と思うようになったそうだ。大学を選ぶときは、偏差値だけで決めないことが大切なのだそうだ。自分が「ここに入りたい!!」と強く思い、受験勉強への覚悟を決められるような大学が良いと教えていただいた。

2 人目の方も東京大学理系学部の方。東大のオープンキャンパスに参加したことがきっかけで東大を志望校に決定。高校 2 年生の 1 月頃から受験勉強を始めた。高校 2 年生の 12 月には、数学を学習し終えていた。早めに勉強を進めることが大切。分からないところがあれば、すぐに先生に質問していたそうだ。また、人それぞれ勉強方法は違うので自分に合ったやり方を探すことも大切だと教えていただいた。

3人目の方は東京大学文系学部の方。高校時代は、週末課題を期限を守って提出することを心がけていた。コツコツ学習することが得意だったそうだ。高校3年生のとき東大を志望校に決めた。東大では、何でもできる人がたくさんいて劣等感を持つこともあった。現在は、家庭教師のバイトをしたり休日は買い物をしたりと充実した日々を過ごしているそうだ。

4人目の方は、東京大学文学部の方。小さい頃から本が好きで、小学生のときから文学部に入りたいと思っていたそうだ。1、2年生のときは、定期テストも模試も大切。全てのテストを真剣に受けることで成績が上がるのだそうだ。高校時代は、10分の休み時間を利用して勉強した。東大の良いところを聞くと、天才と友達になれること、と答えてくださった。東大には、天才と呼べるような優秀な人がたくさんいて、その人の話を聞けるのが楽しいそうだ。

二高から東大に進学した方から勉強方法を教えてもらい、嬉しかった。どの先輩も丁寧に答えてくださり、自分の将来について考えることができた。

東京研修2日目、東京大学でFair windowの企画に参加した。始めに駒場キャンパスを案内してもらった。駒場キャンパスは、東京大学に入学した学生全員が前期課程の2年間を過ごす。図書館には自習コーナーがあり、テスト前には、取り合いになるそうだ。洋書や専門書も揃っていた。

次に、ワークショップ「進路を見つめ直す」があった。自分が将来やりたいことについて考えた。その後、東大生のプレゼンテーションを聞いた。将来の夢から逆算して東大を目指した方や先生の勧めで東大を受験した方。東大に入るまでの道のりは違っても、将来やりたいことを考えて高校時代を過ごされたのだとわかった。

ワークショップの後、本郷キャンパスに移動。本郷キャンパスには、赤門、安田講堂銀杏並木など東大を象徴する風景が広がっている。午後の最初の活動は、個別相談会。2人の学生さんに質問した。1人目は、文科三類の方。高校時代は、定期テストに向けてコツコツ学習していたそうだ。高校生のとき授業で源氏物語を習い、古典に興味を持ったので文科三類を目指した。受験生のとき気をつけていたことは、模試の結果に一喜一憂しないこと。志望校の判定ばかり気にするのではなく、どこができなかったのか復習することが大切なのだそう。私も実践しようと思った。2人目は、教養学部の方。受験生のときは、1日6～13時間勉強したそうだ。長時間の学習に1年生のときから慣れておくとよい、というアドバイスもらった。また、高校生のとき苦手だった数学は、わからなくなった少し前まで戻って勉強したそうだ。根気強く学習することが大切なのだと思った。

最後に、法学部の模擬授業を受けた。樋口准教授と成瀬准教授の2人が授業をしてくださった。普段からお2人で授業をしているそうだ。テーマは、「国境を越える刑事法」。具体的には、過去に起こった事件がどのように解決されたのかを教えてくださいました。とても難しいお話だったが、最後まで楽しく授業を聞くことができた。大学の授業の形式について

でも教えていただいた。学部によって授業形式は異なり、話し合ったり発表する機会を設けている授業もあるそうだ。

「東大生」と聞くと、自分とは違う世界の人のように思っていたが、今回の企画に参加していい意味で東大生のイメージが変わった。移動中も声をかけてくださったり、丁寧に質問に答えてくださったりと温かい雰囲気を感じた。

東京研修では、社会で活躍している方や東大生の方のお話を聞くという貴重な体験ができた。この研修を企画してくださった全ての方への感謝の気持ちを忘れずに、将来について考え、日々努力していきたい。